ボードレール『悪の華』初版における付加形容詞の前置について　①

中　島　淑　恵

富山大学人文学部紀要第 61 号抜刷
２０１４年８月

ボードレール『悪の華』初版における付加形容詞の前置について　①

中　島　淑　恵

はじめに

英語やドイツ語とは異なりフランス語では，付加形容詞は後置されるのが一般的である。文学的でない口語，しかもパリを中心とした北部のフランス語では，この傾向はさらに顕著である。しかし，文学的文章では，伝統にのっとって，あるいは作品に古風な趣を与えるため，または文体上の調和のために，この慣用的規範を大きく逸脱している[1]例が散見される。『悪の華』冒頭の詩「読者に」で，「偽善者たる読者よ (Hypocrite lecteur)」[2]と呼びかけるボードレールの諸作品において，付加形容詞の前置はその文体的特徴の一つを形成しているといっても過言ではない。

小論では，1857年の『悪の華』初版における付加形容詞の前置についてまず観察し，この現象がボードレールの韻文においてどのような傾向にあるかについて考察を加えるものである。さらに，『悪の華』が一般に普及しよく読まれるようになった1861年の第2版におけるこの現象のあり方と比較検討を行うことによって，短い期間ではあるが初版で見られた特徴に継時的な変化があるか否かについて検討し，ひいては小散文詩集や評論などボードレールの散文において，この現象は受け継がれているのか否かについて考察を広げるための手がかりとしたい。

このことは，ボードレール自身の文体的特徴から，その詩学の一端を伺う試みでもあり，また，言語学者エミール・バンヴェニストがボードレールに関するその草稿[3]の随所で，「詩的言語 (langage poétique)」と呼んでいるところのものの特徴のひとつについて精査することにも繋がってゆくのではないかと思われる。

より具体的に言えばこの試みは，ボードレールの文章の古典趣味あるいは英国趣味を証明するに留まらず，付加形容詞が前置されることによって補強される主観的価値が，文学的文章においてどのような効果あるいは意義を持ちうるのかについて考察することにもつながり，象徴派と呼ばれる詩人たちを中心に後続の文学者に大きな影響を与えたボードレールの詩学を再検討することにもなるのではないかと思われるのである。

1.『悪の華』における付加形容詞の前置

1-1. 数形容詞

付加形容詞の前置について考察するにあたって，フランス語では必ず前置され，後置は文法

的にあり得ない，したがって『悪の華』においても必ず名詞に前置されている，冠詞類に属する形容詞（指示形容詞・所有形容詞・疑問形容詞），不定形容詞については，ここでは考察の対象としないことをまず確認しておきたい。

ただし，必ず前置される数形容詞については，特徴的であるとみなし得る点が若干認められるので，初めに簡単に触れておくことにする。

不定冠詞とみなされる1 (un / une) を除くと，『悪の華』で用いられている数形容詞は, 2 (deux) が19回で群を抜いて多く，これに1000 (mille)が9回，9 (neuf)と6 (six) の2回，3 (trois) と100 (cent) が1回であり，それ以外の数形容詞は一度も用いられていない。ここで特徴的であると思われるものは，6が「半年(six mois)」の意で2回とも熟語的に用いられているように，2の用例もすべて,「両手(deux mains)」「両足(deux pieds)」「両腕(deux bras)」「両眼(deux yeux)」[4] など，対になっている人体の一部を示すために用いられているか，対で示される二者が示されている場合に限られているという点である。特徴的な例として,「恋人の死」において, 恋人である「我々(nous)」について，数形容詞2ばかりでなく，その存在の二重性（double, jumeaux）が集中的に示される箇所を確認しておこう。

Nos <u>deux</u> cœurs seront <u>deux</u> vastes flambeaux,
Qui réfléchiront leurs <u>doubles</u> lumières
Dans nos <u>deux</u> esprits, ces miroirs <u>jumeaux</u> (p. 1225)
我々の心はふたつの大きな松明,
その二重の光を照らし出す
この双子の鏡たる私たちの精神の中にある。

数形容詞2が他の数形容詞と比べて際立って多く用いられているのは，『悪の華』において「眼」や「手足」といった身体的部位が特権的地位にあること，とりわけ「眼」はその人の内奥を映し出す「鏡」として表象されることが多いこととも関連しているのであろう。また,「理想と現実」の往還が随所に認められる同作品において，両極性あるいは双数性がその美学の重要な要素となっていることからもこのような傾向は納得が行くものである。さらに，おそらく「子音d＋母音」といった音韻構造が，詩人の好む音韻のひとつを形成し，同様の音韻構造を持つ他の単語または表現との共鳴を可能にする機会が多いためなのではないかと思われる[5] が，この点についてはまた稿を改めて論じることにしたい。

数形容詞9についても，うち1例は「私はお前を9度抱き締める黄泉の川ではない(Je ne suis pas le Styx pour t’embrasser neuf fois)」という神話の共通理解を前提としているものである。これに対して3の用例「三叉の絞首台(gibet à trois branches)」ともう一つの9の用例「29スー（二

束三文）の宝石(bijoux de vingt-neuf sous)」も，その事物の具体的な特性を示しながらも，慣用句的に用いられているものといえるだろう。

「百の悪鬼(cent démons)」が唯一の用例である100と，1000の用例のすべてについては，その数を具体的に示しているというよりは，「夥しく数の多いさま」を表しているものとみなすことができる。それは，「前世」において「私の住居」を「千の火(mille feux)」に染め，「ある植民地生まれのひとに」では，「詩人の心」に「千の詩(mille feux)」を芽吹かせるのである[6)]。

また，序数を示す形容詞は，通常のフランス語においても，名詞に前置されることもあれば，後置されることもある。『悪の華』においては，「最初の(premier)」の用例として，前置が「最初の誓い(premier serment)」として見られるほかは，「最後の(dernier)」の用例として，前置の用例が詩句の中に3例「最後の秘跡(derniers sacrements)」,「最後の喘ぎ(dernier râle)」「最後の袋(dernier sac)」あり，いまひとつは「反逆」詩篇の鑑の散文の中に,「最後のラテンの頽廃(dernière décadence latine)」という表現があるが，後置については，「最後の熱さ (chaleurs dernières)」という用例が1例見られるのみである。この最後の後置の用例については，後置されることによって詩句末におかれた「最後の(dernières)」という語が，「光(lumières)」という語と脚韻を構成していることも指摘しておきたい。

「多くの(maint / mainte)」という形容詞も数形容詞にならって必ず前置されるものであるが，これも『悪の華』に見られる8例すべてについて前置されていることを付け加えておく。

1-2. 原則として前置される付加形容詞とその後置

初級文法でも示される通り，通常のフランス語においても，いくつかの短い付加形容詞は原則として名詞に前置される。したがって小論でもそのような形容詞については考察の範囲外のものとして考えておきたい。ただし，『悪の華』においては，これらの表現が多用されることによって，前置される形容詞の総数が結果として多くなっていることだけは指摘しておきたい。通常のフランス語において原則として前置される形容詞を出現頻度順に並べると以下のようになる。

「小さい(petit) 」「より小さい(moindre)」,「年老いた・古い(vieux)」「よい(bon)」「よりよい(meilleur)」「大きい(grand)」「きれいな(joli)」「他の(autre)」「悪い(mauvais)」「より悪い(pire)」[7)]

これらの形容詞は，『悪の華』においても原則として名詞に前置されるが，ごくまれに後置されていることがある。ここでは，原則からの逸脱の例として，これらの形容詞の後置の例を観察しておきたい。

まず，「墓のように大きな穴(trous grands comme des tombeaux)」のように形容詞の後にそれ

を補う表現が連続する場合，すなわち「～のように大きい」などといった表現の場合は通常のフランス語でも当該の形容詞は後置されるのが原則である。また，文意としては先行する名詞を修飾しているが，後続する形容詞との間がカンマで区切られている場合，構文上は連続性が途切れていると考えられるので，後置の用例とは別に考えるべきであろう。ちなみにこのような例は,『悪の華』の随所に散見されるが, これについては以下後置の例外とみなすことにする。

これ以外に上述の形容詞で後置される用例が見られるのは，後置によって固有の意味を持つとみなされるもの，すなわち熟語表現になっていると判断されるものとして「老いさらばえた高級娼婦(courtisanes vieilles)」と「悪しき道(chemin mauvais)」があげられるほかは，原則として名詞に後置される形容詞とともに用いられている「不吉で大きな雲(Un nuage funèbre et gros)」や「あれほどまでに光り輝きあれほどまでに美しい日々 (jours si brillants et si beaux)」の例が挙げられる。

「美しい(beau)」という形容詞が名詞に後置されているこれ以外のケースが4例あるが，そのすべてが「いとも(si)」または「より(plus)」といった程度を表す副詞に先立たれており，またそのすべてが詩句末にあって，それぞれ「肌(peau)」「墓(tombeau)」「枝(rameaux)」「新しい(nouvelles)」と脚韻を構成していることが分かる。

すなわち,『悪の華』において，通常は前置される形容詞が後置されるのは，構文上の必然であると同時に，詩句の音綴数を整え，脚韻に配慮するための修辞的すなわち詩的選択の産物なのだということができよう。

1-3. 名詞に前置されるか後置されるかによって意味の異なる形容詞

さらに，通常のフランス語においても，名詞に前置されるか後置されるかによって大きく意味の異なる形容詞も存在する。すなわち, その人物の客観的な特徴を述べているに過ぎない「背の高い男(homme grand)」とその人物の内面的な価値に踏み込み，その価値を称賛する意図までも含んだ「偉人(grand homme)」との違いである。これらの形容詞においては，前置であるか後置であるかによる意味の隔たりは，全く異なる意味になるものからそれほど違いのないものまで多彩であるが，前置される場合には，一般に主観的価値判断が含まれるか比喩的な意味が含まれる傾向があるものといえる[8)]。以下に『悪の華』の用例からこれらの形容詞の後置と前置のあり方について観察しておきたい。

1-3-1.『悪の華』においては前置の例しか見られない形容詞

ここでは，通常のフランス語において前置されるか後置されるかによって意味が変わり得る形容詞のうち,『悪の華』において前置しか用例のないものについてまず見ておくことにする。後置の用例がないので，意味の変化はないということになる。まず，前置では「固有の」，後

置では「清潔な」と全く意味の異なるpropreという形容詞であるが，これは「自分自身の噂(sa propre rumeur)」および「自分自身の美徳(sa propre vertu)」の２例しかない。

あまり大きな意味の隔たりはないが，前置されると「真正な」後置されると「本当の」という意味になるvraiについても，『悪の華』には「真の栄光の国(vrai pays de gloire)」および「真の王たち(les vrais rois.)」といった前置の２例があるのみである。

また,「太った・大きい」という意味では原則として前置され, 後置されると「妊娠している」という意味になるgrosも『悪の華』では「大きな箪笥(Un gros meuble)」と「不吉で大きな雲(Un nuage funèbre et gros)」の２例しかない。

さらに，これも前置と後置によってあまり大きな意味の隔たりのないjeuneについても，「若い娘たちdes jeunes filles」「若く巨大な女une jeune géante」「若い象un jeune éléphant」「お前の若いからだTon jeune corps」「この若い骸骨ce jeune squelette」「その若い率直さsa jeune candeur」「その若い頭sa jeune tête」「若い灌木jeunes arbrisseaux」「若い巫女la jeune prêtresse」と９つの前置の用例があり, 唯一の例外は上に見た「私は雨がちの国の王のよう, 富裕で, しかし無力, 若く, けれどもとても年老いている（Je suis comme le roi d'un pays pluvieux, / Riche, mais impuissant, jeune et pourtant très-vieux）という詩句で，jeuneが意味の上では「王(roi)」を修飾しているとみなすことができるが，カンマで区切られていることもあり，後置の例とみなすべきものではないだろう。

このほか，前置されていると「高貴な」という意味になり，後置されていると「貴族の」という意味になるnobleも，『悪の華』においては「高貴な機械(noble machine)」「お前の高貴な身体ton noble corps」「お前の高貴な脚(Tes nobles jambes)」「高貴な態度(les nobles attitudes)」「愛しき高貴なる大地(aimable et noble terre)」の前置のみ５例である。

さらに，前置されていると「不快な」という意味になり，後置されていると「不潔な」という意味になるsale も，「不快な匂い(de sales parfums)」「不快な天井 (sale plafond)」「不快な抱擁(sales caresse)」の３例があるのみである。いま一度のsaleの用例は，カンマを隔てて前の詩行末にある「古い寂れた空き香水瓶(vieux flacon désolé)」に構文上かかっていることが分かる,「縮んだ，粉っぽい，不快な，ぞっとする，ねばねばする，割れた(Décrépit, poudreux, sale, abject, visqueux, fêlé)」に含まれる一例のみであって，これは上に見たように例外的な後置の用法とみなすべきものであろう。そしてこの場合も，修飾されている名詞が「香水(parfum)」を想起させる「瓶」である以上，前置されているこの形容詞の他の用例を考慮すれば，後置とみなされるからといって「不潔な」という意味を示しているとは必ずしも言えないのではないかと思われる。

また，前置と後置で意味の変わる代表的な形容詞であるtristeとpauvreについても，圧倒的に前置の用例が多く，後置はむしろ例外的であることが分かる。

「哀れな／貧しい(pauvre)」

前置11例　「この哀れな身体(ces pauvres corps)」

「この哀れな瀕死の病人(Ce pauvre agonisant)」

「哀れな男(le pauvre homme)」

「哀れな死者たち(les pauvres morts)」

「哀れな土地(une pauvre terre)」

「我が哀れなミューズよ(Ma pauvre muse)」

「哀れで孤独なわが魂よ(pauvre âme solitaire)」

「哀れな天使よ(Pauvre ange)」

「哀れな姉妹よ(Pauvres sœurs)」

「哀れな悪魔よ(pauvre diable)」

「哀れなジャッカルよ(pauvre chacal)」

後置2例　「貧しい放蕩者(un débauché pauvre)」

「貧しく裸の人々 (gens pauvres et nu)」

この場合，後置されている2例は，文法書の記述通り客観的な状況を示す「貧しい」という意味で用いられているものと考えられるが，圧倒的に前置で用いられている「哀れな」という意味が全く含まれていないわけではないようにも思われる。『悪の華』の詩的空間において反響する意味の連関は，あるいはこのような場合にも影響を及ぼしているのではないだろうか。同じように，前置されてはいるものの，「哀れな土地(une pauvre terre)」の用例はむしろ，意味的には「貧しい土地」を指しているようにも思われる。また，前置の用例のうち「我が哀れなミューズよ(Ma pauvre muse)」「哀れで孤独なわが魂よ(pauvre âme solitaire)」「哀れな天使よ(Pauvre ange)」「哀れな姉妹よ(Pauvres sœurs)」「哀れな悪魔よ(pauvre diable)」「哀れなジャッカルよ(pauvre chacal) 」の6例は頓呼法を形成しているということ,「哀れな土地」以外はすべて，人間または生物に付加されているということも確認しておきたい。

「哀れな／悲しい(triste)」

前置7例　「私の哀れな夫(mon triste mari)」

「哀れな病院(triste hôpital)」

「私の哀れな不遇(ma triste misère)」

「哀れな美しさ(la triste beauté)」

「哀れな心(le triste cœur)」

「哀れな声(la triste voix)」
「私の哀れな脳髄(mon triste cerveau)」
後置2例　「夜よりも悲しく暗いある昼間(un jour noir plus triste que la nuit)」
「この悲しく黒い島(cette île triste et noire)」

この形容詞は，前置されても後置されてもあまり大きな意味の隔たりはないが，後置の2例にはいずれも，比較表現が伴われる（「夜よりも悲しく暗いある昼間(un jour noir plus triste que la nuit)」のケース）ことや，近代フランス語では本来後置が原則である色彩を表す形容詞とともに後置されている（「この悲しく黒い島(cette île triste et noire)」のケース）など，『悪の華』の作品世界ではこの形容詞はもともと前置で用いられるのが原則であって，後置されている場合には必ず統辞上の理由があることが分かる。

最後に，特に意味が大きく変わるわけではないが，「聖なる」の意味を表すsaintについても，後置は1例のみで聖人の名前はもちろん，前置が原則となっていることを確認しておきたい。

「聖なる(saint)」
前置7例　「聖アントワーヌ(saint Antoine)」
「聖ペテロ(Saint Pierre)」
「聖なる軍団(saintes Légions)」
「聖なる真実(la sainte Vérité)」
「聖卓(Sainte Table)」
「神聖な若さ(sainte jeunesse)」
「聖なる肉欲(saintes voluptés)」
後置1例　「聖なる家庭(foyer saint)」

この形容詞の場合，聖人の名前だけでなく，修飾される名詞が大文字で示される「聖なる軍団(saintes Légions)」「聖なる真実(la sainte Vérité)」「聖卓(Sainte Table)」についても，聖書の故事を踏まえての記述であり，普通名詞を修飾している「神聖な若さ(sainte jeunesse)」「聖なる肉欲(saintes voluptés)」および後置の「聖なる家庭(foyer saint)」の方が例外的な用法であり，中でもとりわけ「聖なる肉欲(saintes voluptés)」は撞着語法的な用法であり，異彩を放っているものといえる。

1-3-2.『悪の華』においては後置の用例しか見られない形容詞

前置されるか後置されるかによって意味が異なる形容詞のうち，「いまいましい／聖なる

(sacré)」「奇妙な／好奇心のある(curieux)」「簡素な／単純な(simple)」および「嫌な／呪われた(maudit)」については，『悪の華』では後置の用例しか見られない。

「聖なる(sacré)」
後置2例のみ　「聖なる大道芸人たち(les jongleurs sacrés)」
　　「聖なる息子(fils sacré)」

「好奇心に満ちた(curieux)」
後置3例のみ　「好奇心に満ちた空(le ciel curieux)」
　　「好奇心に満ちた行政官(magistrats curieux)」
　　「好奇心に満ちた残酷な小人たち(des nains cruels et curieux)」

「単純な(simple)」
後置1例のみ　「単純な様子(l'air simple)」

「呪われた(maudit)」
後置6例のみ　「呪われた道具(l'instrument maudit)」
　　「お前の呪われた隷属(ton esclavage maudit)」
　　「その呪われた歯(sa dent maudite)」同一詩句が2回反復
　　「これらの呪われた動物(ces animaux maudits)」
　　「これらすべての呪われた老人(tous ces vieux maudits)」

したがってこれらの形容詞では，その置かれた位置によって意味が異なることはなく，後置による意味だけを考えればよいということになる。

1-3-3. 前置と後置の用例が併存する形容詞

次に，前置されるか後置されるかによって意味が異なり，『悪の華』において前置と後置の用例が併存する形容詞について以下に見ておきたい。

「純粋な／無垢の(pur)」
前置6例　「この上なく最高に純粋な要素(la meilleure et la plus pure essence)」
　　「純粋な光(pure lumière)」
　　「純粋な神の飲み物(une pure et divine liqueur)」

「唯一の純粋な精神(purs Esprits seuls)」
「純粋な鏡(De purs miroirs)」
「純粋なエーテル(un pur éther)」
後置2例　「あらゆる狼藉を免れた果実(Fruits purs de tout outrage)」
「単なる肉欲(la volupté pure)」

この形容詞についても，前置の用例の方が多く，後置の用例でも，「「あらゆる狼藉を免れた果実(Fruits purs de tout outrage)」については，後続する連辞があるために必然的に後置となっているのであって，純粋に後置されているのは「単なる肉欲(la volupté pure)」のみである。この場合も『悪の華』においては前置が支配的であることから，前置によって意味される「純粋な」という意味が全く含まれていないとはいえないように思われる。

ちなみに，対義語である「不純な」は通常のフランス語でも後置が原則であり，『悪の華』の用例でも4例すべてが後置されている。

「旧弊な／古い(ancien)」
前置1例　「旧式の葬送馬車(d'anciens corbillards)」
後置4例　「古代の諸民族(peuples anciens)」
「古い僧院(Les cloîtres anciens)」
「昔の悔恨(remords anciens)」
「昔の苦しみ(douleurs anciennes)」

後置されている4例はいずれも，この形容詞が単なる「古い時代の」という指標として機能しているのに対し，前置されている1例は「太鼓も音楽もない旧式の葬送馬車が，私の魂の中で列をなして進んでゆく(Et d'anciens corbillards, sans tambours ni musique)」といった具合に,「旧弊な・旧式の」という否定的な主観的価値判断の含まれた表現となっていることが分かる。また，この形容詞の場合，後置されている方がむしろ好ましい意味で用いられているとみなすこともできようが, うち2例はそれぞれ,「異教徒の(païens)」(「昔の悔恨(remords anciens)」のケース),「私のもの(miennes)」(「昔の苦しみ(douleurs anciennes)」のケース）と脚韻を構成し，韻文特有の意味の連鎖と反響に貢献していることが分かる。

「いにしえの／古代の(antique)」
前置6例　「いにしえの娼婦(une antique catin)」
「いにしえのパルミラ(l'antique Palmyre)」

「いにしえの館(les antiques manoirs)」
「いにしえの意識(l'antique conscience)」
「いにしえのヴィーナス(l'antique Vénus)」
後置4例　「古代の偶像(des idoles antiques)」
「古代の音節(des syllabes antiques)」
「古代のスフィンクス(sphinx antique)」
「古代の祖国(sa patrie antique)」

『悪の華』では，修飾される名詞の時代が古いことを示す形容詞は，先に見た「古い／旧弊な(ancien)」よりも，この「古代の／いにしえの(antique)」という形容詞の方が多く使われている。また，後置が4例であるのに対して，前置が5例と，前置で用いられる方が多くなっている点も「古い／旧弊な(ancien)」とは大きく異なる点であるといえる。通常のフランス語ではこの形容詞が前置されることがむしろ稀であることを考えると，『悪の華』においてこの形容詞はささやかながら特権的な地位を与えられているといえるのかも知れない。さらに，後置で用いられている4例はすべて，この形容詞が詩句末に位置し，それぞれ「古代の偶像(des idoles antiques)」は「公の(publiques)」と，「古代の音節(des syllabes antiques)」は「律動に満ちた(rythmiques)」と，「古代のスフィンクス(sphinx antique)」は「象徴的な(symbolique)」と，「古代の祖国(sa patrie antique)」は「神秘的な(mystique)」と脚韻を構成している。また，前置されている場合も，「いにしえのヴィーナス(l'antique Vénus)」がアレクサンドランの前半の半句を形成している1例を除いてすべて形容詞に前置された名詞が詩句末に位置することになっていて，この形容詞を前置とするか後置とするかの判断が，単なる文体的な選択によるものではなく，韻文としての修辞的な配慮によって行われていることが分かる。この形容詞においては，前置されているか後置されているかによる意味の違いはそれほど大きくはなく，むしろ韻文としての体裁を整え，脚韻によって律動・音韻・意味のさらなる重層的な反響の実現が企図されているのではないかと思われる。この形容詞が，『悪の華』において特権的な位置を占めているように思われる所以である。

「貴重な／（値段が）高い(cher)」
前置9例　「貴女の愛しいからだ(ton cher corps)」
「貴重な毒(Cher poison)」
「貴女の愛しいすすり泣き(Tes chers sanglots)」
「イポリットよ。愛しい心よ(Hippolyte, cher cœur)」
「我が愛しい学者よ(mon cher savant)」

「その大切なセラファンたち(ses chers Séraphins)」
「おお愛しき不遇なる者よ(ô cher déshérité)」
「愛しき無邪気な女よ(chère indolente)」
「愛しき女神よ(chère Déesse)」
後置3例　「私の最も大切な死者たち(mes morts les plus chers)」
「いとも貴重な思い出(souvenir si cher)」
「愛しい影(des ombres chères)」

この形容詞の場合，『悪の華』では，後置されているからといって意味が「（値段が）高い」に変化しているわけではなく，むしろ前置か後置かという判断は，意味の違いには影響を及ぼしてはいないように思える。したがってすべての用例が「貴重な・愛しい」という意味を示しているのであれば，後置されているケースがむしろ例外といえるであろう。また，後置されているケースのうち，「私の最も大切な死者たち(mes morts les plus chers)」は最上級，「いとも大切な思い出(souvenir si cher)」は程度を表す副詞「いとも(si)」に伴われており，これらのケースは通常のフランス語でも形容詞の後置が可能なケースである。また，いずれの場合も詩句末にこの形容詞が位置することになり，それぞれ，「私の最も大切な死者たち(mes morts les plus chers)」は「（画家の）ブーシェ(Boucher)」と，「いとも大切な思い出(souvenir si cher)」は「肉体(chair)」と脚韻を構成している。このことも，これらのケースが，意味を変えることなく形容詞を後置させることによって詩句を構成するための配慮の産物であると判断する目安になるだろう。また，そのような程度を表す副詞なしで形容詞が後置されている唯一のケースである，「愛しい影たち(des ombres chères)」も詩句末に位置していて「御者の(cochères)」を構成している。よってこのケースについても，形容詞の位置によって意味の変化がないことも含め，脚韻構成のための修辞的配慮と判断することができよう。

前置されているケースについては，詩文ではないがすでにテオフィル・ゴーティエに宛てた献辞の中で，「我がいとも親愛なる，いとも尊敬すべき，師にして友人(À MON TRÈS-CHER ET TRÈS-VÉNÉRÉ / MAÎTRE ET AMI)」と呼びかけたボードレールであれば，同様の呼びかけ，すなわち頓呼法の中にその用例を見出すことは容易である。

「甘美な／柔らかい・甘い(doux)」
前置15例　「甘美な額の(au doux front)」
「その甘美な熱(ses douces chaleurs)」同一表現が2例
「甘美な微笑(un doux souris)」
「甘美な匂い(doux relent)」

「甘美な秘密(doux secrets)」　同一表現が2例
「甘美な帝国(doux empire)」
「甘美な感謝(un doux remercîment)」
「甘美な音(doux bruit)」
「愛らしく優しい女(aimable et douce femme)」
「故郷の甘美な言葉(Sa douce langue natale)」
「甘美な倦怠(douces langueurs)」
「優しい雌驢馬(une douce ânesse)
「甘美な墓(une douce tombe)」
後置8例　「秘密のように甘美な香り(Son parfum doux comme un secret)」
「海のように深く甘美なわが愛(mon amour profond et doux comme la mer)」
「かくも甘美な貴女の心(ton cœur si doux)」
「かくも甘美な香り(parfum si doux)」
「恋文(billets doux)」
「力強く優しい猫たち(Les chats puissants et doux)」
「甘美で緩く遅い律動(un rythme doux, et paresseux, et lent)」　同一表現が2例

この形容詞は『悪の華』において出現頻度が非常に高く，その事実だけでも『悪の華』において特権的な地位を占めていることが分かる。また，前置の用例が後置の用例の2倍となっているのも特徴的であるといえる。後置の用例にはこのほかに，構文上付加形容詞の後置とみなしうる，「子供の肉のように新鮮な，オーボエのように甘美な香り(parfums frais comme des chairs d'enfants, / Doux comme les hautbois)」と「お前の不可思議な目[中略]／代わる代わる優しく，甘美で残酷な(Ton œil mystérieux, […] / Alternativement tendre, doux et cruel)」，そして「強く優しく魅力的で美しい猫(Un beau chat, fort, doux et charmant)」があるが，いずれも修飾される名詞から遠く隔たり，カンマで区切られてもいるので，ここでは例外的な用例と考えておくべきものであろう。

この形容詞の後置の用例でもう一つ特徴的なのは，後置の用例のいずれもが，語義の違いだけではなく，構文上後置にすべき理由を持っていることである。すなわち，「秘密のように甘美な香り(Son parfum doux comme un secret)」と「海のように深く甘美なわが愛(mon amour profond et doux comme la mer)」の2例は接続詞「のように(comme)」に伴われた比較構文が後続しており，「かくも甘美な貴女の心(ton cœur si doux)」と「かくも甘美な香り(parfum si doux)」は程度を示す副詞「いとも(si)に伴われていて，「恋文(billets doux)」はこのかたちで成句なのであり，「力強く優しい猫たち(Les chats puissants et doux)」と「甘美で緩く遅い律動(un

rythme doux, et paresseux, et lent)」については，後置されるのが原則の他の形容詞と並立している，といった具合である。

このことから，『悪の華』の作品世界では，この形容詞は原則前置されるものであり，意味としても前置によって醸し出される主観的な価値判断が入っている「甘美な」という比喩的な意味が支配的であり，後置されるのは構文としての必然性がある場合に限られている，ということが分かる。

「唯一の／それだけの(seul)」という形容詞も，名詞に前置されるか後置されるかによって意味の異なるものであるが，『悪の華』には前置・後置ともに2例ずつある。前置は「ただ一人の師(un seul maître)」「唯一の望み(le seul espoir)の2例，後置は「無垢の存在そのもの(les purs Esprits seuls)」「その家庭だけ(le foyer seul)」の2例のみであり，頻出単語であるように思えて意外に出現頻度が低いことからも，この例のみをもって意味その他の違いを云々するのは適当ではないように思われる。

次に，前置されるか後置されるかによって意味が異なることに加えて，前置が例外，あるいは修辞的逸脱と感知されるものの，それがむしろ古典趣味，より具体的にはラシーヌの詩文を参照しているように思われる二つの付加形容詞「素晴らしい／優れた(superbe)」と「悲惨な／残酷な(cruel)」の用例について見ておくことにする。

まず形容詞「素晴らしい／優れた(superbe)」については，前置が「素晴らしい宮廷服(un superbe habit de cour)」および「素晴らしい幽霊(le superbe fantôme)」の2例，後置は「卓越した残骸(la carcasse superbe)」の1例のみで，もう1例の後置とみなせる例は，「太陽は，夕方，流れるように素晴らしく（le soleil, le soir, ruisselant et superbe）」と，構文上名詞「太陽(soleil)」を修飾していることは分かるが距離が遠くカンマで区切られている例外的なケースであるため，出現頻度の低さから言ってもその効果を云々するほどのものではないように思われる。

次に，これよりはるかに出現頻度の高い「悲惨な／残酷な(cruel)」の用例について見ておきたい。

「悲惨な／残酷な(cruel)」

前置6例　「最も悲惨な病(les plus cruels maux)」

「その悲惨な病人(ce cruel malade) 」

「その悲惨なくちづけ(ses cruels baisers)」

「これら残忍な娘たち(ces cruelles filles)」

「これらの獰猛な食欲(ces cruels appétits)」

「残忍で傷つけるチクタク音(Un cruel et blessant tic-tac)」

後置5例　「残酷な太陽(le soleil cruel)」

「お前の残酷な口(ta bouche cruelle)」
「容赦なく残酷な夏(ête implacable et cruelle)」
「残酷で聞く耳を持たぬ魂(âme cruelle et sourde)」
「残酷で物見高い小人たち(des nains cruels et curieux)」

後置の例外 「お前の神秘的な目[中略]／代わる代わる優しく，甘美で残酷な（Ton œil mystérieux, […] / Alternativement tendre, doux et cruel）」

この形容詞においては，前置であるか後置であるかによる意味の違いはあまりなく出現頻度も後置の例外を除いて前置が6例，後置が5例と一見拮抗しているように見えるが，後置の例のうち3例は，この形容詞が単独で用いられているのではなく，後置が原則である他の形容詞と組み合わせて用いられているということが分かる。したがってこの場合も『悪の華』においては前置による用法の方が支配的となっているのであり，意味に及ぼす影響もおのずから前置による意味が優っているものと判断できるのではないだろうか。

2. 主観的価値判断が入りやすいと思われる付加形容詞

このように見てくると，通常のフランス語では後置が原則である付加形容詞についても，主観的価値判断が入りやすいと思われるものは，『悪の華』では前置されることがあるように思われる。このような主観的価値判断には，肯定的なものと否定的なものがあるだろう。まず肯定的なものについて見たあとで，次に否定的なものについて検討し，それぞれの前置の意義について全般的な検討を加えることにしたい。

2-1. 肯定的な主観的判断が入りやすいと思われる付加形容詞

ここでは，通常のフランス語では原則として名詞に後置されるにもかかわらず，『悪の華』では前置の用例が見られる付加形容詞のうち，明らかに肯定的な意味を持ちうると考えられるものについて検討を加えることにしたい。

まず,「愛すべき(aimable)」とそれとほぼ同義の「愛らしい(adorable)」という形容詞であるが，『悪の華』では，この二つの形容詞はいずれも以下の前置の例しかない。

「愛すべき(aimable)」

前置のみ8例 「愛すべき動物(aimable bête)」
「愛すべき優しい女(aimable et douce femme)」
「愛すべき高貴なる地(aimable et noble terre)」
「愛すべき娘たち(aimables filles)」

「愛すべき夕べ(aimable soir)」
「愛すべき医者(Aimable médecin)」
「我が愛すべき悔恨(nos aimables remords)」
「愛すべき疫病(aimable pestilence)」
「愛らしい(adorable)」
前置のみ2例　「愛らしい魔女よ(Adorable sorcière)」
同じ表現が二回反復される。

これらの用例を観察してみると，「我が愛すべき悔恨(nos aimables remords)」「愛すべき疫病(aimable pestilence)」といった前者の2例はその修飾関係が撞着語法であるように思われるものであるが，いずれにしても好ましい価値判断によって前置が行われていることが分かる。これらの形容詞は，通常のフランス語においても，例えば手紙文などで，相手を大切に思う気持ちを込めたい場合には前置されることも多いものであるが，後置の例が全く見られないことからも，『悪の華』においてある種特徴的な用法となっているといえるのではないだろうか。

明らかに肯定的な意味を持つと考えられるこれ以外の形容詞では，これほどはっきりと前置しか用例がないわけではなく，後置もまた見られるのであるが，「完璧な(parfait)」と「至高の(suprême)」についてそのありようを見ておくことにしたい。

「完璧な(parfait)」
前置1例　「完璧な道具(parfait instrument)」
後置1例　「完璧な絵(tableau parfait)」

「至高の(suprême)」
前置2例　「至高の微笑み(un suprême sourire)」
「至高のさよなら(les suprêmes adieux)」
後置2例　「至高の力強さ(puissances suprêmes)」
「至高の牧草地(la pâture suprême)」

この二つの形容詞については用例も少なく，また前置されるか後置されるかで特に意味が異なっている訳でもないが，前者にはゴーティエに宛てた献辞に「フランス文学の完璧な魔術師(AU PARFAIT MAGICIEN ÈS LANGUE FRANÇAISE)」という表現があるのと同時に，反逆詩篇の鑑に付けられた文章の中には「完璧な役者(parfait comédien)」という言い回しが見られ，また後者にもラテン語で書かれた詩「ワガふらんきすかへノ賛歌」の冒頭に付けられた文章の

中に「至高の息(suprême soupir)」という表現が見られる。これらの用例が詩文ではなく散文の中で見出されることにボードレールの特有語法とでもいうべき付加形容詞の前置のあり方が伺えるのではないだろうか。

2-2. 否定的な価値判断が入りやすいと思われる付加形容詞

次に，明らかに否定的な価値判断が入りやすいと思われるいくつかの形容詞について見ておきたい。「ひどい(terrible)」および「ぞっとする(hideux)」の2語に着目してみる。

「ひどい(terrible)」
前置のみ4例　「そのひどい両眼(ses terribles jeux)」
「夜のひどい食事(un nocturne et terrible repas)」
「ひどい放蕩(le terrible prodige)」
「ひどい楽しみごと(De terribles plaisirs)」

「ぞっとする(hideux)」
前置のみ4例　「ぞっとする群れ(un hideux troupeau)」
「このぞっとする拷問(ce hideux tourment)」
「ぞっとする残骸(de hideux débris)」
「ぞっとする歓喜(hideuses délices)」

一見してわかるように，肯定的な意味を持つ「愛すべき(aimable)」や「愛らしい(adorable)」といった形容詞と好対照をなしているかのように，これらの明らかに否定的な意味を示している形容詞には，『悪の華』において後置の用例が全くない。通常の語法では基本的に後置されるものと考えられるが，ここで前置の用例しかないことは，やはり何らかの修辞的効果を表しているといえるのではないだろうか。

これ以外の明らかに否定的な意味を担うと思われる形容詞「恐ろしい(horrible)」「身の毛もよだつ(affreux)」「悪い(vil)」「不吉な(sinistre)」「ばかげた(stupide)」には，前置の用例も後置の用例も存在するが，「ある夜私は身の毛もよだつユダヤ女の傍らにいてUne nuit que j'étais près d'une affreuse juive」の詩文に喚起されるような，付加形容詞の前置によって醸し出される文字通り「身の毛もよだつ」恐ろしさは，その表現の根幹をなすものといえるのではないだろうか。

結びにかえて

こうしてみてくると，形容詞の前置によって喚起される特性は主観的あるいは感情的価値判断であり，それは文学的文章においては「文学性」の指標として感知されうるものであることが分かる。もちろん，韻文すなわち定型詩においては，詩句の音綴を一定にするため，あるいは脚韻を構成するため，通常は名詞に後置するはずの形容詞を前置し，結果的に名詞が詩句末におかれることがあるということは承知しておかなければならない。しかし逆に言えば，通常の文章では後置するはずの形容詞を名詞に前置することによって，結果的として韻文特有の破格を構成すると同時に，詩的であると感知される構文を作り出しているのだと考えることもできるだろう。

今回は主観的価値判断を中心に，明らかに肯定的な意味を持つ形容詞と同じく明らかに否定的な意味を持つ形容詞とを対比してみるに留めたが，より中間的な意味，おそらくボードレール特有の詩法によって，肯定・否定の二分法ではとらえ切れない複雑かつさまざまな事物のありようがさらに明らかになるのではないかと思われる。

とりわけ，通常のフランス語では必ず後置される，色彩を示す形容詞や事物の形態を示す形容詞，あるいは状態を示す形容詞に関しても，『悪の華』には夥しい前置の用例がある。これをボードレールの古典趣味であるとか英語趣味であるなどといって片づけるのは簡単なことであるが，初心に戻って一度，そのありようを精査してみる必要があるのではないかと思われる。次稿において検討することにしたい[9)]。

注

1）Maurice Grevisse et André Goosse, *Le Bon Usage*, 15e edition, De Boeck Université, 2011, p.427.

2）ボード―レール『悪の華』からの引用は，Claude Pichois et Jacques Dupont, *L'Atelier de Baudelaire : « Les Fleurs du Mal »*, Tome II, Honoré Champion, 2005. より行っている。1857 年の初版テクストは同書 981 頁から 1230 頁までに収められている。以下詩句の部分的な引用については，書面が煩瑣になるのを避けるため，いちいちページ数を記すのを避けた。ただし，詩節や散文部分など，必要がある場合は同書のページ数のみを示している。

3）Émile Benveniste, *Baudelaire*, Lambert-Lucas, Limoges, 2011. 例えば 414 頁。「詩的言語はまずさまざまな存在について言おうとする。その特異さにおいてそれらを名指し，それらを示し，そしてそれらを固有のものとして感じさせる (Le langage poétique veut / d'abord dire des êtres, les / nommer dans leur singularité / les présenter et les faire / sentir comme. uniques)」

4）うち 2 例は，「二つの宝石 (deux bijoux)」，「二つの穴 (deux trous)」であるが，いずれの場合も「両眼」を指す比喩であることが文脈から明らかである。

5）後で見るように，『悪の華』には「甘美な／柔らかい (doux)」という形容詞が多数用いられている。「2(deux)」との音韻上の親和性は明らかである。

6）100 と 1000 についてはバンヴェニストも何かを感知していたようで，草稿には，「1000 頻出，100 1 回 (*mille abondant* ; *cent* 1 fois)」とある（前掲書 116 頁）。

7）Grevisse の前掲書（p. 325）による。なお，ここに挙げられているのはそれぞれの形容詞の男性単数

形のみであり，これらの形容詞の女性形および複数形も同じように原則として名詞に前置されることは言うまでもない。

8）これについても Grevisse の前掲書（p. 432）を参照のこと。
また，ジャン・コーエンは形容詞の位置を大きく 4 つのケースに分類している。1. 通常後置される形容詞（関係や色を表す形容詞），2. 通常前置される形容詞。数は限られており，リストを提示することができる。3. 前置も後置も可能であるが，意味は変わらない形容詞。4. 前置するか後置するかによって意味が異なる形容詞。しかし，3 の場合厳密に言って本当に意味はまったく変化しないのかについては一考をようするようにも思われる。Jean Cohen, *Structure du langage poétique*, Flammarion, 1966. を参照のこと。また，バンヴェニストもこの，形容詞の前置と後置の問題については注意を払っていたようである。前掲書 271 頁の草稿には，『悪の華』について，前置される形容詞（aimable, vils, riches, savant, antique, vieille, sourde, plaisant, piteux）と後置される形容詞 (répugnant, pauvre, clandestin, banal, infâme) の一覧表が示されている。もっともこの一覧表は網羅的なものではなく，おそらくバンヴェニストの耳に特徴的に感知されたものだけが記されているのではないかと思われる。

9）コーエンは前掲書 187 頁で，形容詞が例外的に前置されている「新鮮な香り (un frais parfum)」という表現について，詩的言語としての 3 つの特性が指摘できるとしている。一つは，形容詞が例外的に前置されているという特性であり，いまひとつは共感覚的な要素を持つ形容矛盾の特性，さらにもう一つは同一子音の反復とその対称性という特性である。小論では，このうち最後の音韻的特性についてあまり詳述することができなかった。今後の論考においてこの点についてもさらに掘り下げて行きたい。